

Takashi Nagano

# 日韓文学シンポジウム を終えて

《現代詩の実験》と藤井貞和

長野隆

この五月三十一日・六月一日の二日間におたつて第五回「日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。まず参加者の一人として、その手応えが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を越えながら「文学の現在」が紡ぎ出されていく。私自身も、聴きまた語りつつ、内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会議が現実、この青森で開催されていること自体が信じられない思いだった。

今さら述べるまでもないが、この会議のもつ歴史的意味あいには極めて大きい。第一回は東京で一九九二年。九三年に済州、九五年に松江、九七年は慶州と回を重ねて今回の青森市での開催の運びとなる。これらを埋める日

韓両国を代表する文学者の数々、彼らのボランティア精神はもとより、国際交流基金や各地方公共団体の強力な支援その他諸々、全く凄まじいエネルギーが結集して、「文学」ならではの熱いヒューマンな競演の実現である。

とりあえず今回のプログラムを記録することからはじめよう。初日は「現代詩の課題」と題し、韓国側からは黄芝雨、蔡好基、李光鎬の三氏、日本側からは藤井貞和と私の二人が参加し、数のバランスから評論家の李光鎬氏に司会の任をあずけるかたちをとった。二日目の午前には「語りの世界の創造」と題し、韓国側は金源祐、尹大寧、徐河辰の三氏、日本側は津島佑子、辻原登、中沢けい、そして司会進行役としてこのシンポジウムの仕掛け人でもある安宇植の四氏の参加。双方円熟の作家たちの集結をみた。午後の部は「混沌の

未来へ」と題して共に中堅・最前線の作家や評論家が集った。韓国側から金英夏、申京淑、殷熙耕、禹燦済の四氏、日本側から島田雅彦、藤原智美、藤沢周、広谷鏡子、星野智幸、これに司会進行役の川村湊が加わった。

「現代詩の課題」のセクションでは、韻律や音数律、また視覚さえも意識した言葉のリズムが話題となった。考えてみれば、これらの問題はほど重要な日韓両国の言語にまつわる歴史的宿題も少ない。はからずも藤井の提出した詩作品の深層モチーフに抵触する形で、遠いようで実に近い東アジア言語文化圏全領域にまたがる、その意味では言語を越えた民族の境界を意識させることになった。

「語りの世界の創造」のセクションでは、日本側の作品として津島の「鳥の涙」、辻原の「遊動亭円木」、中沢の「カラオケ流刑地」が対象にされ、特に津島の「私語り」における小説的復権の意識性が話題になった。韓国側からの金の「反風土記抄」、尹の「蛇に噛まれた痕」、徐の「塔仙里」も興味深く鑑賞された。そこで韓国での〈近代〉が暗に問われたところも聞き逃せなかった。

「混沌の未来へ」では、島田の「燃えつきたユリシイズ」、藤原の「メッセージボード」、藤沢の「海で何をしていた?」、広谷の「不随の家」、星野の「裏切り日記」が紹介され、まさに現在の日本の抱える多様な社会問題を

意識させた。「私」という「個」の輪郭のなさや空虚さをいかに言葉が捕捉しうるか、という八〇年代以降から継続する文学的問題とも交叉した。韓国側の金の「吸血鬼」、申の「野原の中の高台の空き家」、殷の「他人への話しかけ」も韓国九〇年代以降の、現在の日本の状況に通じる人間のもつ多様な孤独やはない私性に触れ、共感をもって読まれた。ここまでくれば、日本の現代文学とは接近戦である。いかにも様変わりした韓国文学が、他人事ではない日本の実状に接触した感じだ。

八左から藤井、長野、通訳、李光镐、蔡好基、黄芝雨の各氏

最後に司会者たち（評論家）が壇上に座り、総括をおこなった。韓国における朝鮮半島南北分断の問題がかすめられつつ、二十一世紀の文学の展望が問われた。私は、韓国においては南北分断の問題が念頭にある限りまだ文学の展開は期待できるが、日本は見えない旨を述べた。むしろ私たちが言葉を捨てることができない限り文学に未来がないはずはない。文学は永遠に存続すると、なかにいた安さんが慌てて言葉を補足し、会議を締め括った。

五回目にしてようやくここまでの文学対面になったいきさつが、会議後にしきりに囁かれた。皆が充実した時間を体感したはずである。会議の冒頭に「詩」を架設し成功したことも、充実した話題になった。わが日本を例外にすれば、当然の布石であろう。

さて、「現代詩の課題」と銘うたれたセクションでは、藤井の三篇——「口語不自由詩」・「憑依文字」（以上「静かの海」石、その韻き）「世界はただそういうふうになっていった昔……」（悲しみをさがす詩）——が提出された。韓国からは黄の「こだまのための覚え書き」他四篇、蔡の「睡蓮」連作五篇である。黄の詩ではハンガルでの音韻への試行、蔡のこの近作では視覚イメージにおけるリズムや詩的形象と身体性などが話題になった。すべて翻訳を介しつつも、東アジアならではの

の共有文化圏を意識させずにはおかぬ、まさに難題となるべき詩の言葉の問題が議論された。しかるに、藤井の〈実験〉である。日本語にして難解なこの実験を翻訳を念頭においてどう解析するか。私の役回りとしては、それに尽きると思われた。

誌面の都合上、結論だけを記せば、藤井のモチーフとして共有されているものは以下の四点に要約されると私は述べた。(1)古日本語と近代日本語文化の断絶。当然、文語定型詩と口語自由詩との対比を際立たせている。であるがゆえの神話的世界への追慕。(2)太古において共有し、古代において流動していた東アジア文化のまさに引き裂かれている現状。それへの哀切。(3)、(2)とともに日本一国内においても現存するアイヌや琉球文化の疎外。これを含まずに日本文化は語れないというメッセージ。(4)これらの問題意識を紐帯する、藤井詩のグローバルなヒューマニズム。

藤井の「口語不自由詩」の不自由で果敢な実験「憑依文字」の引き裂かれた〈漢字文化圏〉と〈周辺アジア文化圏〉の〈沖縄〉の現在（歴史）を組上にした実験の批評性は、このシンポジウムのなかで、とりわけ近親と共感の念を満場に共有せしめたことを報告しておきたい。

現代詩の未来は、やはり見えない。が、抒情の普遍を疑うことは決してできない。